
ハヤテのごとくをシリアス風コメディにしてみたinパラレルワールド

夢火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテのごとくをシリアス風コメディにしてみたinパラレルワールド

【Nコード】

N6856H

【作者名】

夢火

【あらすじ】

お嬢さまに捨てられ、自殺を謀った某借金執事だったが、彼が次に目覚めたそこは関西弁少年の妹や金髪縦ロール女神の幼馴染み、自称十七才の生徒会長やフラグ建設済みの人気投票第一位などが居る、何かがズレた世界だった。

ぷろろーぐ1 (前書き)

この小説は昔、私が某サイトにて公開していた小説を修正したものです。とりあえずはプロローグ部分に当たる場面だけ公開し、必要がありましたら続きを執筆していきたいと思っています。また、この小説内では登場人物の性格や口調が多少変更されています（主に主人公の某執事が該当）ので注意して下さい。

ぷろろーぐ1

——失いたくないから護ると決めた——

それは幾多の不幸を経験した彼自身の儚い誓い……
彼にとって、その誓いの象徴こそ執事という役柄だった。

だから彼は演じた。執事という仮面を被った愚者の役柄を……

主の為にと寝る間を惜しんでも要望に答え、どんなに心が折れそうでも周りの人たちには常に笑顔を向けた。優しく、温かく、孤独と絶望の淵に居た自分を受け止めてくれた兄ようになりたいと心に秘めて。

それが彼が主と出会ったあの夜から追求めた理想であり、アイデンティティーだった。

そんな彼の周りには彼に想いを寄せる少女達が居た。彼の主が、かつてのクラスメイトが、彼の憧れる少女が、皆一同にして彼に好意を抱いていた。

もしかしたら、その淡い少女達の想いに鈍感な彼でも気が付いていたのかも知れない。

……けれども、それらの想いに彼は決して答える事などなかった。

想いに目を背けて彼は執事という名の象徴で在り続けた。

幼き頃に初めて自分を愛してくれた、そして彼自身も愛した人と

の別れが、未だに心の奥深くに罪惡の十字架が突き刺さったままの彼では、再び誰かを心から好きになることが出来なかったのだ。

そんなトラウマの所為で彼は自身が幸せになる事を、そして自分の居場所がなくなる事に極端に怯えた。

自分の幸せはいらない、大切な人達を、やっと見つけた居場所を守る為ならこの身を全て捧げる。

執事として、個人として、彼が導き出した答えがそれだった。

自分の居場所を守る為に身を捧げる。だが、護ったところで彼は自身の幸せを望まない。余りにも不幸で、余りにも歪んだ答え……だからこそ純粋な想い。

あの時、主を護る為に咄嗟に彼が言い放った、自らの身を呈した遺産相続の条件はある意味、彼の想いそのモノの形だった。

その条件は彼自身を日々危機に晒すものであったが、彼はそれを望んだ。

理不尽な理由で死を宣告された不幸な運命から自分を救ってくれた主を護る為に、やっと見つけることが出来たに居場所を護る為に、……それゆえに彼に迷いはなかった。

——不敗——

想いと誓いを両手に握りしめ、最初から自身の”個”を捨てていた彼は圧倒的な強さを見せつけ、次々と迫り来る主の外敵に対して常に不敗を貫き通した。

私欲、怨恨等と自分の為に行動する人間が絶対無私という並々ならぬ覚悟を持つ彼を倒すなど不可能だったのだ。

過去の罪を償う贖罪の為に、大切な人達と過ごす今の為に、未来へ馳せる想いの為に、いつしか自分を許すことが出来た時に”象徴”ではなく、かつて無くした”個”としての笑顔を浮かべる為に……

そうやって彼は居場所と大切な人を護り続けた。

だが、そんな彼の魂がついに折れてしまった。

不敗不屈の肉体と魂を持った彼の心を壊したのは皮肉にも彼が護るべき存在である主の言葉だった。

——お前は私に嘘を吐いていた——

偽りの言葉と虚構の想いで固められた信頼の歯車が狂ってしまったのだ。

最初からズレを生じていた歯車……それらは今までは奇跡的に噛み合った歯車が回っていたに過ぎなかった。

——お前は主である私を今までずっと裏切り続けてたきたんだ！——

なんで……僕はただ……

彼は怯えた。知っているからだ。この後続く言葉を、その意味を。それは彼にとっては孤独と絶望の待つ地獄へ片道券。

——お前なんか——

嫌だ……言わないで……僕は失いたくない……一人はもう……

——ねえ、神サマ。こんなにも僕を苦しめて何が楽しいの……？——

彼は天を嘲笑うかのように無気力な瞳で煌めく星たちが蔓延る空を眺めた。

——いや、そんな事、今更どうでもいいや——

無意識の内に彼は主と出会った公園の前まで来ていた。
ふらりふらりとその足取りは何かに吸い寄せられるかのようにして
彼はあの自販機の前まで歩み寄る。

——結局、僕は最後には何もこの手に残らない、カラッポの人間だ
ったんだ——

彼は自販機の前でしばらく立ち尽くし、そして数分後何かを思い付いたようにして再び足を動かした。

——そうだ、何にもないんだ、僕には……だったら、もう……——

彼が歩みを止めた場所は公園の前に引かれた道路の真ん中だった。
しかも、大型のトラックがこちらに向かってスピードを出しながら
彼との距離を縮めている。辺りがかなり暗い所為か、運転手は彼の
存在に気付いていない。

「……生きてる意味なんてないよね……」

ドゴッ!!

まるで生氣の感じられない彼の顔がトラックのライトに照らされた刹那、その場に酷く鈍い音が響いた。

痛みの前に全身を過った浮遊感。頭から吹き出て来る鮮血。

ズチャ……

二度目の音は『何か』が地面に叩き付けられたような低く、短い音。それと同時に彼の体に伝わって来る冷たいアスファルトの感覚、そして激痛。

体から血が抜けていく様子が感じられる。それに段々と意識も遠くなっていく。そして直ぐに体は痛みを感じなくなっていた。

——アーたん……やっぱり間違ってたのは僕だったんだね——

足音を立てながら確実に近づいてくる最期の時。

彼がその時に浮かべ人は、今でも色褪せる事なく鮮明に思い出せるとある少女の儚げな笑みだった。

——ほんと、馬鹿だな、僕は——

トラックの運転手と思われる男性の呼び声を耳にしながら、赤く染まった視界の向こうで、最期の時に彼女の幻想を見た彼は満足そうに笑い、自分を中心に咲いた鮮血の赤い水溜まりを確認して気を失った。

☆

クスクス、と誰かの笑い声が聴こえたような気がした。

——随分と面白ね、君の人生は——

声……？

——でも、ここで君がこの舞台から降りるには少しばかり早い気がするんだよ——

誰、なんだ……？

——それに僕は君が気に入った——

聞いたことのある声……とても身近な……

——どうだい？ 今度は『僕の世界』で演じてみないかい？
脚本と観客は僕、主人公はもちろん君だ、ヒロインや他の登場人物は君が気に入る人を用意しているよ——

君が何を言っているのか分からない。演じるって一体何を……？
それにさっきから何なんだよ、君は……

——おっと、僕とした事が自己主張がまだだった。
それに役柄も説明していなかったね——

………

——君が演じるのは僕の世界の『僕』……つまり、綾崎ハヤテさ

！な、なにを……！？

——つと、お喋りが過ぎたね。そろそろ時間だ。脚本はもう書き上がっているんだ。だから僕は観客として楽しませてもらうよ——

声が聞こえなくなると同時に彼は何かに取り込まれるような感覚が襲われた。

ぷろろーぐ2 知らない天井？ いやいや、全部知りませんよ

耳をすませば微かに聞こえる小鳥の鳴き声、空気を吸えば鼻を突くような消毒液の独特の香り、そして目を開けると入ってくるのは清潔的な印象をもたらす白で覆われた部屋、そこで僕は目を覚ました。

「……………っう」

まだ意識が完全に覚醒しきっていない僕の頭にズキズキと針で刺されるような痛みが走った。

恐る恐るその箇所を左手を伸ばすと、僕はそこで初めて自分の頭に包帯が巻かれている事を知った。ついでに左手の方にも目をやると擦り傷が所々にあった。

「……………あれ？」

とりあえず上半身だけでも起こそうと腰に力を入れた。だが、思うように体に力が入らず、それどころか全身に気だるさのような怠惰感さえ感じる。

多分、意識を失ってから何日か寝た切りが続いたせいで体が鈍ったんだろう。この気だるさはきっとその所為だ。

起き上がるのを諦め、ただ何となく擦り傷の付いた左手を天井に掲げ、それを見つめながら思わず苦笑した。

「……………まだ生きてるんだな……………僕は」

目覚めて最初に口から漏れた言葉がそれだった。

第三者からすれば、なんてネガティブな奴なんだ、と思われるだろう。そもそも時速八十キロは出ていたであろう大型トラックに正面からぶつかってこの程度の傷で済んだのにあんな台詞を吐く人なんて、馬鹿か自殺志願者くらいだ。

……まあ、僕はその二つで言うなら後者に該当するけどね。

そんなネガティブ思考を頭に巡らせていると僕はふと、ある事に気付いた。

「……何だろ、目が……」

最初は意識が目覚めた頃も多少目に違和感があったものの、それは寝起きの所為だと思い、気にも止めていなかったが徐々に意識も回復し、それと同時に違和感が大きくなり完全に覚醒した今の状態になって僕はやっとそれが正常ではない事を確信した。

そう、何故か目に映る辺りの映像が妙にぼやけるのだ。

僕は視力に関しては人並み以上に良いと自負していたので決して目が悪い訳でもない……筈だった。

だが、今の僕の目の状態は明らかに視力が低下しているとは思えない。それかなり急激に。

「……まっ、どうでもいいか……」

とはいえ、今の僕にとっては自身の視力の低下どころか、例え失

明していたとしても本当にどうでも良かった。

そんなことよりも今は考えるべき懸念事項が一つある。どうして僕が生きてるか、だ。

多分、予測できる範囲で考えるなら、あのトラックの運転手が僕を轢いた事に気付き、慌てて僕をこの病院に運んだのだろう。というかそれ以外に考えられない。

——全く、余計な事をしてくれたものだね……そのまま僕なんかをほっというて逃げれば良かったのにさ。

でも、少し疑問が残る。

僕は意識が飛ぶ前に自分の体から大量の血が流れたのを見た。いくら体が頑丈で傷の治癒が早いとはいえ、あれだけの血が出る程の怪我を負ったのに、傷跡どころか手術の跡すら見当たらないなんて不自然だ。確かに頭に包帯が巻かれているものの、軽くカーゼの上から巻くようなものだ。

そして気になると言えば、あの時にぼんやりと見た夢は一体なんだったんだろう？

まあ内容は漠然とでしか覚えていないけど。

でも、疑問は他にも色々が残るが、結果として重要な事が一つ分かった。

「……生きてる……」

そう、僕はあの時に死ぬ筈だったんだ……それなのに……！

「なんで生きてるんだよっ……！ 生きる意味なんてもうないのに……」

拳を握りしめ、思い切りベッドに叩き付けた。

自分でも情けなく涙を流していることが分かる。だけど、どんなに止めようとしても涙が目から感情と一緒にになってどんどん零れ落ちてくる。

——なんで僕は生きてるんだ

——僕には自らの死を選ぶ権利すら持ち合わせていないのか

ぐちゃぐちゃになった思考が頭の中で過るだけで行き処のない感情がますます涙腺を弱くする。

大切な人に捨てられ、居場所を無くし、生きる意味すら無くした僕にどうしろって言うんだよ……

「……………なんで僕は……」

抑えの効かなくなった感情が再び理性を支配していく。

怖い、捨てないで、独りにしないで、僕を助けて、幸せにして、不幸にしないで、離れないで、嫌だ、嫌だ、いやだ、イヤだ、イヤだ、イヤ——

ぎゅっ……

「……………！」

溢れ出る感情に僕が後少しで押し潰されそうになった時、暖かい
何かが僕の右手を優しく包んだ。

確かに最初から違和感はあった。起きた時から自分の右手に『
何か』が乗せられているような重圧があったから。でも、それは体
がただ単にダルいからそんな感覚がしたんだと思った。それに上
半身すら起こさずにずっと天井しか視界に入ってなかった、だから
それに気付かなかった。

ぎゅっ……

また、右手が握られた。しかも今度は先程よりも強い力で。強い
力とは言っても、当たり前だが痛い程ではなく、むしろ優しく、手
を通してその暖かさが伝わって来た。

——ああ、これは人の温もりだ。

負の感情に囚われていた僕にとって何十年ぶりにも思える”それ
”は一瞬の内に僕の心を穏やかにしてくれた。

僕は恐る恐る、右手に寄せられていた”それ”を握り返してみた。
思っていたよりも柔らかく、小さな”それ”が放つ優しい温もり
を包み込むように僕は慎重に扱った。

僕はその時にふと、右手を握っているであろう人物の顔を確認し
てみようとしたが、どうやら僕の隣にいた人物は椅子に座ってベッ
ドにもたれ掛かるようにして眠っているようで、顔は見えなかった。
髪は一応見えたが、銀色短髪をした少女のようだ。

あれ？　なんだろこの既視感……この子、どこかで見たような……

何故だかそんな不思議な感じがしたが、とりあえず流石にずっと手を繋いだままというのは些か悪いような気がしたので、僕はゆっくりとその手を離れた。

「……んっ……えっ？」

僕が手を離れた事に気付いたのか、どうやらその人物は目を覚ましたようだ。

僕の方もいい加減、その人物が誰か気になってきたので気だるい体に鞭を打って無理矢理、上半身を起こして隣の人物を見つめ——
——時間が止まった。

「……咲夜、さん？」

先程から僕の隣で手を握っていたのが咲夜さんだった、という事実だけでも驚愕なのに彼女は次にとんでもない爆弾発言を僕に投下した。

「……ハヤテお兄ちゃん……？」

……あつれえ？ おっかしいなー僕にMy Brother
は居たけどSisterはいなかった筈だけどなー

ぷろろーぐ3 妹と幼馴染みは王道ですね、分かります。

咲夜さんの爆弾発言が投下され、約三十秒経過、未だに僕の頭はフリーズ状態——そして時は動きだす。

結論

……うん、多分事故で頭を強く打った影響で幻聴が聞こえてしまったんだ。そうだ。そうに違いない。そうだと言ってくれ。アハハハ、いいやあなんだ、幻聴かあ、

「……？　どうかしたん、お兄ちゃん？　さっきから固まったままやけど……」

……残念ながら、どうやら幻聴でなく紛れもなくリアルらしい。

咲夜さんは首を傾げながら純粹な瞳で僕を見つめながら言った。気のせいかな、何時も咲夜さんと雰囲気少し違うような……

「あ、あははは……咲夜さん、怪我人相手に冗談キツイですよ。いい加減その『お兄ちゃん』って言うの止めてくれませんか？」

さっきまでのシリアスタ임は一体なんだったんだろう、って思いながら僕はとりあえず苦笑の笑みを作って僕を見つめている咲夜さんにそう返した。

幻聴でなければ、これは咲夜さんの何時ものボケだ。今回はちょ

「うち演技が普段より力が入っているだけで今にも『ツツコミが遅いねん!』」と僕の頭にハリセンによる一撃が飛んでくる筈だ。

あつ、でも一応、怪我人だから頭は止めて欲しいなく、と考えている時、ふと咲夜さんの表情が視界に入りそれと同時に僕は本日二度目となる驚愕の出来事を目の当たりにした。

「ぐすっ……なんでなん?」

そう、なんと僕の隣に居る咲夜さんの表情は今にも泣きそうなものだったのだ!

「えっ!?　ちょ、ちょっと咲夜さん……?」

僕は基本的に女性に弱い。特に泣き顔や涙なんかはこうかばつぐん、かいしんの一撃、クリティカルなんですよ。そんな僕だから今の彼女の表情を見てしまったら速攻でパニックになってしまう訳です。

「ぐすっ……なんでお兄ちゃんの事、お兄ちゃんって呼んだらアカンの?　それにウチの事、何時もみたい『サク』って呼んでくれへんし……敬語なんて使ってるし……」

……………

「いやいやいやいや、ちょっと待って、なんかさりげなく凄い事言ってますか?　咲夜さん!」

いや、確かに『お兄ちゃん』の件は咲夜さんの誕生日の時にそれらしき話を話していたのは覚えてますが、ちゃんとその時断りましたよ!?

あれ?　でも僕が咲夜さんを『サク』なんて愛称で呼んだ事、あ

りましたっけ？ それに僕は基本的に誰にでも普段から敬語を使っているし……

とまあ、そんな具合で先程の発言に対しての疑問は大量に沸き出してくるが、それらは一旦置いて僕は何よりも今は咲夜さんを泣き止ませる事を優先した。

——だからまずは、その咲夜さん涙を食い止める！！

ぎゅっ

「……へ？」

「ごめんよ、サク……お兄ちゃん、さっき目が覚めたところだから少し寝惚けていたみたいだ……もう、心配しなくてもいいよ」

うわああ！ 俺K u s e e e e e e e e e e ! !

我ながら鼻が曲がりそうなくらい臭いプンプンの臭すぎる台詞を吐きながらそっと咲夜さんを抱き締めながら腕の力を強める。

とりあえず、ここは会話を合わせる事に専念してこの場の沈静化を謀ろう。疑問なんか後回しでいい。

僕は抱き寄せた咲夜さんの頭を撫でる。

ああ、なんか咲夜さんの髪っていい匂いがするなく、それになんだかとても暖かい。

鼻孔を擽る甘い香りと

咲夜さんの暖かさに僕は言いようのない安心感を感じた。

——そろそろいいかな

しばらく経った後、僕は咲夜さんが落ち着いたのを見計らって体を離そうとした。だが——

「……お兄ちゃん」

どうやら彼女はまだそれをよしとせず、腕に力を入れてきたので結局離れる事が出来ずに今もがちりとホールド状態のままだ。

咲夜さんはしっかりと僕を掴んだ状態で視線をこちらに移した。心なしか若干、その顔は赤みが差していたような気がする。

「ウチ、ずっと心配やってんで？ お兄ちゃん、ずっと眠ったままやったから……」

ずっと、か……そうなる僕にけっこうな時間、眠っていたんだ。

「……だから、お兄ちゃん……もうどこにも行ったらアカンで……？」

胸元で震えながら呟いた咲夜さんの頬には一滴の雫が流れていることに気付いた僕は再び彼女を優しく包み込み、赤ちゃんを扱うようにポンポンと背中を揺すった。

——さて、そろそろ状況確認をしようかな。

まず、第一に気になるのは今、僕の胸元に居る咲夜さんだ。流石にここまで来て、今までのが全て彼女の丹精籠ったボケでした、というオチはないだろう。いくら僕でもさっきの涙が感情の込

められたものかどうかくらい判断出来る。

いやまあ、可能性としては少しあるかもしれないけどさ……

じゃあ、眼前に居るこの少女が咲夜さんではなく、よく似た別の誰かだという可能性はないだろうか？

例えば、咲夜さんとよく似た人物が居たとして、その少女に偶然、僕とよく似た兄弟が居て偶然、その兄弟が事故か何かでこの病院に入院して偶然、見舞いに来た咲夜さん似の少女が偶然、僕とその兄弟の病室を間違って入って来てしまった。うん、それなら咲夜さんと別人ということで先程の会話の内容もまだ説明が付けられ——
——ないな。

そんな都合のいい事がある訳がない。

それに話をして分かった事だが、この子は間違いなくあの咲夜さんだ。

姿形はもちろん、彼女の雰囲気というか、なんだかそういった感じが咲夜さんと同じものなんだ。

だけど何故だろう？

僕に対する言動や態度は確かに違うが、それより他に何か根本的な部分で妙な違和感を感じる……

コンコンッ

僕が考えに煮詰まったところで突然ノックの音が部屋に響いた。

「どうぞ」

僕がそう言う前に咲夜さんが扉の方まで行って代わりに返事を返したので僕は再び思考の世界へ入ろうとした。けど、部屋に入ってきた人物が僕の視界に入った瞬間、それは出来なかった。

「あら、目が覚めたのですね……ハヤテ」

その人は僕と同一年くらいの女の子だった。そしてその容姿は僕にとって確かに見覚えのあるものでもあった。

意思の強い独特の眼光を放つ薄い朱色の瞳に気品のある縦ロールに巻かれた金色の髪。

あり得ない……だって彼女がこんな所に、僕の目の前に居る筈がないじゃないか！

それに彼女と別れたのは十数年も前だ。容姿も違うかも知れない……

だけど、目の前に居る人物の姿は僕の記憶にある彼女をまさにそのまま成長させた姿だ。いくら頭で理性が否定しようとも、心が目の前に居る人を彼女だと叫んでいる。

啞然としたまま部屋に入ってきた人物に釘付けになった状態で固まる僕は、次に咲夜さんが言った言葉で先程までの葛藤を打ち消すことになった。

「どうしたん？ お兄ちゃん、固まって……せつかくアテ姉ちゃんがお見舞いに来てくれてんのに」

アテ、ねえーちゃん？

僕はその言葉にハッと意識を取り戻し、目の前にいる彼女を無意識の内に幼き頃の愛称で名前を呟いていた。

「……アーたん？」

ぷろろーぐ4 君と僕、そしてあの人が登場

運命や絆なんかが必ずしも漫画や小説に出てくるようなロマンチックなものではないと僕は今までの経験からそう断言出来る。

『ずっと一緒だ』なんて甘い言葉を簡単に信じ、幸せになろうとした結果、結局は裏切られる。

事実、僕は先の言葉を口にした二人の少女に最終的には、いとも簡単に捨てられた。

別にその二人を恨んでいる訳じゃない。むしろ彼女達は被害者であって傷つけたのは無知で馬鹿な僕の方だ。

二度目はない、そんな大口を叩いてた割りには僕はその言葉を二度も信じた。そして傷つけたんだ。自分だけじゃなく、居場所を作ってくれた彼女達を……

こんな男と絆で結ばれている人も居なければロマンチックな運命を共にする人も僕には居ない。

切りたいと願うのに決して切れない『両親』との絆

切れないでと願うのに切れてしまう『彼女』との絆

絆なんて曖昧で厄介なだけなんだ……

今の僕には誰との運命や絆……ましてや最初に切れてしまったはずの大切な人との糸が再び僕と結び付くなんて有り得ないと思う……

…いや、思っていたんだ。

僕の瞳に再び映るこの人を見るまでは……

「「……………へ？」」

幼き頃に僕が名付けた彼女の愛称、二度と口にする事はないだろうと思っていたそれを呟いた僕に、少女二人は揃って同じ声を出した。

片や関西少女は純粹にその言葉事態に驚いた様子で目をぱちくりさせながらこちらを伺い、片や金髪女神の少女は顔を赤くさせながら焦った様子で口を金魚のようにパクパクさせながら固まって居る。

……………あれ？ まさかの人違い？

余りにも彼女達二人の状態異常『サイレント』が長く続いた為、僕の脳裏にそのような考えが一瞬過ったが、それは次の瞬間に消し飛んだ。

「な、な、な、……ハヤテ！ あなた何を寝惚けた事を言ってるの！？」

彼女はサイレント状態から自力で回復したと思えば大声を挙げて僕に詰め寄って来た。ちなみに咲夜さんは未だにこちらのじつと見つめたまま固まって居る。

ああ、この懐かしい感じ……間違いない。人違いなんかじゃないんだ……

そこになんの根拠はない、だけど僕の中で込み上げて来るこの懐

かしさを疑う理由もない。

もしかしたら、これはただの夢なのかも知れないし、死ぬ間際に神様が見せた幻想かも知れない。

だけど！ それでも構いやしない……！

だって、あんなにも遠かったはずの彼女が、もう二度と触れる事すら出来なかった彼女が！ 今、僕の目の前に手を伸ばせば届く場所にいるのだから……

「……会いたかった、会いたかったよ、アーたん……」

力の入らない体を無理矢理引き摺りながら、言い寄って来た彼女に対して有無を言わせずして僕は力一杯に、且つ優しく包み込むようにに胸元に引き寄せて抱き締めた。

「ちょ、ちょっとハヤテ！？ いくら何でも冗談が過ぎますわよ！？」

胸元でこれでもかと言わんばかりに焦り慌てる彼女はその言動とは裏腹に体の方はじたばたした様子はなく、じっとしたまま抵抗の様子が見られなかった。

うれしい、こんなにも名前を呼ばれてうれしかったことはない。

僕は成長した彼女の体を抱きしめながら、一段と腕の力を入れる。

ああ、それにしてもこんなにも色んな所が成長しちゃって、何だか前とは抱き締めた時の感触が違うな————いかん、このまま

じゃ理性が持たない。

「そ、それにいきなり幼稚園の頃のあだ名で呼ぶだなんて……」

あれ？……ちよつと待って、『幼稚園の頃』……？

危うく理性が飛ぶ寸前、ビーストモードにトランスフォームしかけた僕は彼女の口にした言葉に、意識を取り戻した。そして感じた咲夜さんと同じような『違和感』

いや、それだけじゃない。何かおかしい……

目の前の二人は僕の知っているであろう人物だ。（片方は成長？している所為で本人かどうか未だに判断出来ないが）それに確かに彼女に対して先程『懐かしい』と感じた——でも何かが違う……

しかし僕はそこでそれ以上の思考する事が出来なかった。何故なら——

「ハ、ハヤテ！！ いい加減離れなさい！！」

と、声は強いものの実際には弱い力で軽くポンツと体を押された。普通ならこの程度の力なくてどうって事もない筈だったが、生憎のところ今の僕は怪我人で先程起きたばかりに加えて足元はフラフラ状態。言わずとも分かるようにそんな体では些細な力でもバランスを崩してしまう。

そして更にそこに不幸&不運スキルがトッピングされるのがTH E綾崎クオリティー。

先程僕が使っていたベッドがちょうど背後にある。しかも”倒れれば”ジャストミートで後頭部に金具部分が激突するような絶妙な位置で。

ここまで説明すれば懸命な読者の皆さんはお分かりでしょ？ 数秒後の僕の姿を。

お察しの通り、気絶フラグです。

「「!？」」

何故か倒れている最中、やたらと後頭部とベッドとの一次的接触ファーストコンタクトまでの時間が長く感じ、僕はその間で彼女と咲夜さんの顔が驚愕の色に塗り潰されていく様子をスローで眺めることが出来た。

ガスッ……

何とも情けない擬音が鎮まり帰った病室に響いた。

え？ ベッドに頭ぶつけた程度じゃ僕みたいな不死身スキル所持のチート野郎は気絶なんかしないって？

フッ、その考えは非常に甘いです。いくらランクSの不死身スキル持ちとはいえ、頭に怪我を負って更に体力もない状態での直撃。それだけの条件が揃えば十分ですね。

「た、大変や！ せっかく気がついたのに……」

「と、取り敢えずナースコールですわ！」

青ざめる咲夜さんと慌てふためる彼女を見ながら僕は意識を手放

した。



「……………」

再び目を覚ました僕はまず最初に部屋を見回した。

当たり前だが先程と何ら変わらない部屋だが、敢えて変化があったと言うならあの二人が見つからなかった事だ。

そこから導き出される答はただ一つ……

なくんだ、さっきの事は全て夢だったんだ

いやあ、よかったよかった、とプラス思考に自己完結させようとしたが、

「あの二人なら廊下で待ってもらって居るよ、主治医として君と話したい事があるからな」

ノックもせず扉から入って来た男の声によって僕のポジティブな思考回路は一瞬にしてズタズタにされた。僕はすかさずその無粋者の顔を見た。

白衣を羽織ったその男の年齢はだいたい二十代辺りといったところ。髪は男性にしては長い方で（まあ、人の事は言えないけど）肩に掛かる程度の長さがある。そして見れば医者だと分かるような名札が胸元のポケットに付けられており、視力が落ちた目を凝らして見ると、そこには『リイン・レジオスター』という文字が……………

……あれ？

「は、はははは……妹、幼馴染みの次はお医者さんと来ましたか……」

いい加減、僕もこの状況が異常だと理解出来てきてきた。

多分、このパターンだとこの人（いや、幽霊かな？）も僕の知らない『別人』になっている筈……

訳の分からない状況に頭が追いつかず、力のない笑みを浮かべる事しか出来ない僕に医者の方好をする神父さんは呆れた様子でため息を吐いた。

「……ふむ、その言動からするに、もしや君も『あちらの世界』から飛ばされたのか？」

………ふえ？ 今、なんて……

「はあ、困ったものだよ……実体があつては霊体の時のように堂々とメイドさんの覗きも出来ないではないか……」

「あの！ 一つ聞きたい事があるんですけど……」

目の前の男が何やらかなり不純な言動を発したような気がしたが今はそれ処じゃない！ もしかしてこの人は僕の知っている――

「……神父さん？」

すると彼はため息混じりに白衣の羽織りをパタパタさせて此方に見せ付けるようにして

「残念ながら今は医者らしいがね……」

と、やる気なさにそう答えた。

——間違いない。

自称、秋葉のロード・ブリティッシュ

他称、沸いて出て来るエセ幽霊神父

紛れもなく、眼前に居るこの男は僕の知る幽霊神父、リイン・レ
ジオスターだった。

ぷろろーぐ5 パラレルワールドって……マジですか？ (前書き)

今回は三人称視点で書かれています

ぷろろーぐ5 パラレルワールドって……マジですか？

「……えーと、聞きたい事が山ほどあるんですけど」

白衣を来た神父の口から衝撃の言葉が放たれた後、数十秒くらい経ってハヤテはパニック状態に陥っていた頭を何とか回復させて慎重に口を開くことが出来た。

しかし、思考が落ち着いたところで今度は溢れるばかりの疑問が彼の頭を悩ませていく。

それは先程、神父が話した言葉の中にはハヤテにとってこの困惑した今の状況を整理するのに無視できないワードが含まれていたからだ。

『あちらの世界から飛ばされた』

そのワードの意味、その重大さ、自分やこの困惑した状況との関連性……たった一つの言葉に込められたそれら全てが今の彼には理解の範疇を越えていた。ハヤテはまず最初にその言葉を切り取って目の前の白衣の神父に問い掛けた。

すると、神父はその質問自体に首を傾げた様子で

「……それに答える前に一つ此方から質問がしたい」

と、質問を質問で返した。

「……？ 構いませんが……」

（おかしいな……今の僕が『此処』で答えられるような情報なんてかなり少ないのに……）

ハヤテはイマイチ神父の意図が掴めないようで、色々と質問される項目を自分なりに想像しながら神父の方を見て相手が口を開くのを伺った。

「君は私のように伊澄くんのオカルト経由で『此処』に来たのか？」
それを聞いてハヤテは思わず眉を竦めた。

「伊澄さん？　いいえ、僕は……」

言葉の途中でハヤテは口を閉じた。さすがに

「自殺をしようとしてトラックに飛び込んで気付いたら病院でした」
なんて事は口に出来ない。それに、

（この様子だと神父さんは僕の『事情』を知らないみたいだ……）

そもそもハヤテは執事をクビになったその夜の夜に自殺を図った為、神父はおろか、彼の元・主やそのメイドすらも彼の行動を知らない筈だ。

「……僕は気付いたらこのベッドで寝かされていましたよ」

間を一つ置いて出来るだけ違和感のないようにそう言い直した。

神父の方はそんなハヤテの違和感に全く気が行っていないらしく、彼が答えた内容について頭を使っているようだ。

「そうか……そうなることややはり伊澄くんが言ってた通り『此方』の人間があれを繋いだのか……」

ぶつぶつと呟く神父にハヤテの疑問は膨らむばかりだった。

「ふむ、色々と説明をすると此方も面倒なんで単刀直入に言おう」

そこで神父は急に呟くのを止め、ハヤテの顔に視線を向けた。

それを聞いて、うわーなんかアバウトだなー等という感想が思い浮かんだハヤテだったが、それは口には出さなかった。否、出せなかった。神父の言った言葉によって

「if、あるいは異世界……まあ、呼び方は幾つかあるが、いわゆるパラレルワールドと言ったところかな、此処は」

………は？

その言葉を聞いてハヤテは時間が止まったような錯覚に陥った。

確かに綾崎ハヤテという少年は今までに数多くの非現実的現象に立ち合った事があった。
オカルト

幼年期にアテネと出会った城やそこにある魔法の鏡、別れの時に見えた忌まわしきドクロの幻想

執事の時に至っては、喋る虎に幽霊や妖怪、竹刀から火を出現させたり薔薇で拳銃相手に戦ったり、明らかにオーバーテクノロジーであるロボットや、それを難なく木刀で一閃したりするような不可能を平気で可能にしたり、物理やら科学やらいろんな法則をねじ曲げてしまうようなビククリ人間達（なお、このカテゴリーには勿論ハヤテ自身も含まれる）

だが、そんな非現実的なオカルト現象に対して人並み以上に抵抗力を持つ彼でさえ、今回は許容範囲を遥かに越えていた。何せ今度の相手は世界ときたからだ。

「まっ、流石にそれだけ言っても理解できないと思うから端的にはこの事態について説明しよう……私としては面倒なんだがな」

固まるハヤテを無視して神父は今度を続ける。

「伊澄くんの話では一週間前に此方の世界の人間が伊澄くん達が使うような霊的な術を偶発的に発動したらしい、それも世界を巻き込むようなふざけた規模の特大級をな。」

しかも、君にとってこれ程ないくらいに身近な人間が……」

そこでハヤテはあの夢の会話が自然と脳裏に過った。

——どうだい？ 今度は『僕の世界』で演じてみないかい？——

「……まさか、僕が……？」

「……？ その様子だと何か心辺りがあるようだな。まあ、正確には『此処の世界の君』がやった事だ」

神父はハヤテの反応を一々気に止める事なく話しを進めていく。

「本来、此方の世界とあちらの世界は繋がってはいけない存在と彼女から聞いている。原理はイマイチ私にも分からないがその状態が均衡すると互いに歪みが生じて色々とマズイ事になるらしい。そこで、私が此処に居る理由だが……まあその伊澄くんに頼まれてな、

今回の事件の究明と解決つと言ったところか」

伊澄は基本的に周りの人間に霊的な事件の事を話せる人間が少なく、なおかつ霊体の神父の方が動きやすいという事で頼まれたそう
だ。

「しかしまあ、私にとってはラッキーだったよ。困った事に何故かこの世界に來た瞬間、此方の実体のある私に憑依してしまつてな……しかも、あちらに居た時と違って体から霊体を抜け出せずにいたんだが……
ふむ、そんな時にタイミングを見計らつたようにあちらの君が私の目の前に居る」

神父は口先を引っ張つたようなかなかり意味ありげの笑みを浮かべて言葉を切り、ハヤテの顔を改めて見た。

「…………へ？」

ハヤテは今まで神父が話した言葉の意味を半分も理解仕切れていない。

——だが、これだけは分かる。

これまで培ってきた不幸という経験が脳内で警報を鳴らしている。

何かろくでもない事に巻き込まれる、と

「私は見ての通り医者だ。この様では動き回るのに何かと不便でね」
そもそも自分にそんなややこしい事実を話している時点で巻き込

む事が確定している。

わざとらしくため息を吐く神父のその表情はハヤテの内なる心配を確証へと塗り潰してゆく。

「さて、そこで再び君に質問だ」

「……なんででしょうか？」

冷や汗を流しながらハヤテは尋ねる。不幸確定と経験が太鼓判を押した。

「病院に籠りきでひたすら仕事に追われる医者と退院後、悠々自適に青春を満喫する学生、行動範囲が広くて事件等を解決するのに適しているのはどちらでしょう？」

神父の言葉はハヤテの脳内変換機能によって

「お前、暇だろ？　なら手伝え」　と変換された。

ぷろろーぐ6 それはあったで有ろう、i fという名のもう一つの日常の始まり

「異世界、か……」

ため息を吐きながら人手が余りいない商店街を歩きながらふと、口からそんな言葉が漏れていた。

いつもよりも長めの前髪を慣れない眼鏡のレンズの外側にやって手元にある一枚の紙切りに簡単に書かれた地図を見ながら周りと自分の場所を確認して歩を進める。それと同時に本日、何度目になるか分からない程のため息をまた吐く。

ため息を吐く度に幸運が逃げていくと言うが、それが本当なら僕の幸運預金額は0を遥かに通り越してマイナスになっているだろう

……

まあ、そんなの関係なしに僕は既に不幸だけど……

このふざけた世界に巻き込まれてから三日後、退院した僕の頭には未だに困惑した頭に漂うモヤモヤ感を完全に拭う事が出来ずにいた。

ちなみに、あの怪我は普通なら三日で退院出来るような浅いモノではなく、本来ならば僕はまだあの硬いベッドの上で眠っている筈だが……

まあ、事は急を要するらしく、半強制的に今回の事件の解決を手伝うことになった僕は当然ながらベッドの上で寝ている事など許される訳もなく、僕の主治医^{らしい}神父さんが何らかの手を回したお陰で早めに退院する事になった。

その神父さんから話を色々、聞いた上で分かった事が三つある。

まず一つはこの世界の人達について。

基本的に知り合いの人間は向こうと変わりないみたいだけど、家族構成や友人関係、その他諸々に大なり小なり違いがあるみたいだ。たしかに彼女や咲夜さんの件もあったし……この辺はしっかり注意しないとね。

そして二つ目に分かった事は僕の役割。

どうやら『こっち』の僕は『何らかの形』でこちらの様子を眺めながら楽しんでいるそうだ。

だからそれを捕まえる為に僕は『こっち』の綾崎ハヤテとして違和感のないよう、ここの人達に溶け込んで何か周りに怪しい点はないか、と情報を集めて神父さんに報告するのが仕事らしい。

あとタイムリミットは四ヶ月と言っていた。

四ヶ月なんて時間がない割りには期間が長いと思うだろうが、どうやら向こうとこっちでは時間にズレがあるみたいでこっちの四ヶ月は向こうではたったの四日らしい。

そして三つ目にこの体について。

どうやら僕も神父さんと同じように『こっち』の綾崎ハヤテの体に意識が定着しているみたいで所々、相違点があるようだ。

例えば、髪型は前の時よりも全体的に少し長めだし、視力も悪いように眼鏡も掛けている。個人的にはまだこの二つは良い……けど、問題は……

「ゼエ、ハア……体力が、無さすぎる……」

まだ病院から一キロも歩いていないのにもう息切れを起こしている。

どこで仕入れた情報か知らないが、神父さんが言うには『こっち』の僕は頭は良いらしいが体力は壊滅的だと言っていた。

「全く……これじゃまるでお嬢さまみたいだな……」

そこで自らが無意識に口にした『ある単語』で僕は思考と共に進めていた歩を停止させた。

「はは……『お嬢さま』？……いつまで彼女の執事を気取っているつもりなんだ、僕は」

今の自分が余りに愚か過ぎて思わず自嘲の笑みを浮かべて空を見上げた。

いつまでも執事という職に拘ってられない……

——それは分かってる。

この世界では僕とあの娘との関係も前とは違っている、何時までも昔に気を止められてばかりじゃ何も出来ない。

——それも理解している。

「……まったく、何を落ち込んでいるだか」

仕事をクビにされた。たったそれだけの『些細な』事だったんだ。今までだってそんな『些細な』事は幾度も経験してきたじゃないか……ただ今回はその『些細な』事に少し情が宿ってしまっただけ……

僕は止まっていた足を動かし、先程よりも歩幅を大きくして再び歩き出した。

居場所を失ったら、また見つければいい。

大切な人に裏切られたなら、また別の自分を受け入れてくれる人を探せばいい。

過去を悲観視する暇があるなら今を見ろ、後ろを振り返って失ったモノに情を馳せる暇があるなら前を見て失った穴を少しでも埋めろ。

今の僕はとにかく前へ進むしか他に道がないのだから――



「……………ここ、か」

手元にある紙切れに書かれた簡易地図と目の前にあるマンションの一室を交互に目をやる。

僕が居るのは、とあるマンションの六階の廊下、『綾崎』と書かれた表札のある扉の前――つまりここがこっちの僕の家らしい。

「うーん、流石に緊張するな、これは」

そうです。今、僕はけっこう緊張しています。

何故、という疑問を抱く人もいますが、安心した状態で何気無い感じで入ると痛い目に合うからです。

なんせ、前回の咲夜さんの件からして母親がタマで父親がクラウスさんとして出てくるような事態もある程度は予測の範囲内として入れて置かなければ、もしもの時の対象に出遅れてしまう。

それに僕はなるべく違和感なく周りに溶け込む必要がある。慎重なくらいがちょうどいい。

僕は鍵を持ってないのでインターホンを鳴らして誰かに入れてもらうしかない。

このマンションは些か古いようで、昨今の高級マンションのように防犯システムが整ったような様子はなく、マンションの中に入る事態は簡単だったが、こうして扉ごしにインターホンを鳴らさなければならぬのも今の僕にとってはけっこう厄介である。

しばらく己の中で葛藤が続いたが、なんとか意を決した僕は恐る恐るインターホンに手を近づけ……

「……あなた、さっきから自分の家の前で何をやっていますの？」
「うわぁお!!!!!!」

いきなり後ろから声を掛けられた所為で思わず変な言葉が口が飛び出してしまった。ちよっと恥ずかしい……

「！ 君は……」

振り返るとそこには、何故か西沢さんが通っている潮見高校の制服をきた金髪縦ロールの彼女が居た。

「ふふっ、いくら何でも驚きすぎじゃないかしら？」

「えっと、その……」

先程の醜態を彼女に再び掘り返されて思わず顔を俯かせてしまった。……けっこう顔が赤くなってるかも

「もう退院するなんて思ってたですわ。案外、丈夫なのねハヤテは」

そうやって僕の顔を見ながらクスクスと笑う彼女がなんだか不思議だった。

本来なら、こうしてまた彼女の笑顔を見れる日が再び来るなんて夢にも思ってたから……

——このまま彼女に今すぐ昔のようにあの柔らかい唇に口付けをして彼女をこの身に抱き締めてその温もりを確かめたい——

彼女を見ている内にだんだん己の中でそんな醜い歪んだ欲求が沸いてきたが、直ぐに自分を戒め、理性を保った。

——勘違いをするな、彼女のあの笑みは『こっちの世界の僕』に向けられているものだ。決して僕に対してのものじゃない——

それに彼女は僕の知っている彼女でもない。
だから下らない一時的な感情で『また』彼女を傷付けるような事をするな……

「……ハヤテ？　もしかして、何処か痛むの？」

彼女はしばらく黙り込んでいた僕を心配した様子で顔を覗き込んできた。

「いや、大丈夫だよ」

「そう？……ならいいわ」

そう言って答えた僕を見て彼女は安堵の息を吐いた。僕の方も自然と敬語を解いて返事をしていた。まるであの時のように。

——ほんと、複雑な気分だね

「あつ、そういえば、まだ言っていないませんでしたね」

彼女は何かを思い出したように声を出した。

「え？」

疑問を浮かべる僕に彼女はさっきの笑顔とは比べ物にならないくらい綺麗な笑みをした。

「お帰りなさい、ハヤテ」

この時の僕はどんな表情をしていたのだろうか？

喜び？ それとも驚愕？

いや、そんな下らない疑問に思考を使う前にちゃんと言わなければならぬ言葉がある。

「——うん、ただいま。アテネ」

こうして僕のもう一つの日々が始まりを告げた。

ぷろろーぐ6 それはあったで有ろう、i fという名のもう一つの日常の始まり

とりあえずここまですがプロローグとなります。皆様の需要がありそうでしたら、現在執筆中の小説の中で続きを優先的に書かこうと思います。

一章その1 おはようを君に（前書き）

とりあえず続きを執筆することにしました。更新ペースは少し遅いと思いますが、よろしくお願いします。

一章その1 おはようを君に

朝。

前までは僕にとってこの時間は普通の学生のようにゆっくりと眠っていられる時間帯ではない。

毎朝、太陽が昇る頃に目覚めるのが当たり前、そこから無駄に広い屋敷の清掃や朝食の支度、朝が弱い困った主を起こすのに頭を悩ませる時間だ。

だがその仕事をクビになり、色々ややこしい事に巻き込まれ何だかんだで普通の学生として暮らすようになってしまった僕はこのゆったりとした朝の時間は少し居心地が悪かった。

「なんて言うか、慣れないな……」

退院し、家に戻ってきてからの最初の朝。

僕はそんな事をぼやきながら目を覚めました。

「……五時、か。」

枕の側に置いてあった目覚まし時計を手に取り、時間を確認して、ふと部屋を見渡す。

無駄な物が少なく、あるのは質素なデスクとノートパソコン、それと小難しそうなタイトルが背表紙に書かれてた分厚い本がびっしりと詰められた本棚、そして学校の制服と上下二、三着程度の私服

が入ったタンス。

ここは”僕”の部屋だ。

自分が言うのも何だかおかしいと思うが、余りにも人間臭さのな
い、質素すぎる部屋だ。人間味が無さ過ぎて僕には”僕”がどうい
う人物か想像できなかった。

（そういえば、勉強が出来るって神父さんに聞いてたけど……：少なく
ても高校生が読むような本は一冊もないなあ）

いまだに慣れない眼鏡を掛けながら本棚に並べられた辞書サイ
ズの本を眺める。試しに一冊取って表紙を巡ったが、そこには英語や
らスペイン語やらロシア語やらと多種類の文字を見た瞬間、僕は何
も言わずにそれを本棚に戻したのは昨日の事だ。

うん、あれは無理だ。

僕は昨日の事を思い出し本棚を眺めるのを止めた。

まあ、とりあえず着替えようかな。その後は部屋の掃除でもしよ
う。一応、綺麗にしてみるみたいだけど隅に溜まった埃とか気になる
しね。こればかりは職業癖かな。

あとは……：そうだ、朝ご飯を作ろう。昨日の晩ご飯は咲夜さんが
作ってくれたしね。

どうやらこの家は僕と咲夜さんの二人暮らしのようで、両親はギ
ャルゲ主人公よろしく、海外出張中らしい。まったく、ご都合主義
とは正にこのことだね。

因みにその両親というのは驚いたことに僕を捨てたダメ夫婦のまんまだった。

流石にちょっと怒りがこみ上げたよ。世界が変わってもあの人達が僕の両親なのか、て思うとさ。

だけど、リビングに飾ってあった家族全員が写った写真を見て直ぐにその怒りは収まった。

——笑ってたんだ。あの人達が、僕と咲夜さんに向けて優しく微笑みかけていたんだ。

その時、僕はやっと理解できた。

ああ、この人達は僕の知っているあの人達とは別人なんだって。

そして同時に思った。

なんでこんなにも家族の笑顔に囲まれているのに、”僕”は笑っていないんだろう、て……



「！　ウソ、もうこんな時間やん！？」

”綾崎”咲夜は寝癖立った髪の毛のままベッドから飛び起きた。昨日、二週間ぶりに帰ってきた兄に腕によりをかけて作ったご馳走をもてなし、何故かいつもよりも甘えさせてくれる兄を嬉しく思い、高潮するテンションでお喋りをしている内にいつの間にか眠っ

てしまっていたのだ。

ベッドで寝ていたのは、おそらく兄が自分を部屋まで運んでくれたお陰だろう。もちろん、目覚ましをセットしている筈もなく、彼女が目覚めたのはいつもよりも一時間も遅い七時だった。

「はよ、朝食の用意してお兄ちゃんを起こさなアカン！」

兄は起こさなければ延々と眠り続けるコアラのような人だ。それに朝食や昼の弁当の準備もしなければならぬ。

咲夜は急いでパジャマを脱ぎ捨て、だらしなく制服に着替えてキッチンに向かった。

そこで彼女はあり得ない光景を目にすることも知らずに……



「うーん、ベーコンエッグとトーストか。まっ、ベターだけいいよね、サラダを盛り付ければ完璧なんだけど野菜は弁当の方に使っちゃったしな」

部屋の掃除を終え、制服にも着替えてた僕はとりあえず冷蔵庫にある食材で弁当と朝食を作った。

弁当の方に見栄えと栄養を考えて作った結果、朝食の方が若干、面白味の欠けるベターなものになってしまったのは些か不服だけど、まあなんとか許容範囲内でしょう。

もちろん弁当は僕と咲夜さんの二人分作ったけど、クオリティは咲夜さんの分の方が高い仕様になっている。まあ、僕としては当然の事だ。

さて、後は皿をテーブルに運んで、僕の珈琲と咲夜さんのアールグレイをカップに淹れて完全だ。

” あっち ” の咲夜さんと好みが同じならアールグレイでいいと思うんだけど、実際どうなんだろうか？

ちよつとそんな疑問を抱きつつ、皿を持ってテーブルに運ぼうとした時、寝癖で所々髪の毛が跳ねた咲夜さんが何故か啞然とした感じで口を開いていた。

え、なんで？ ていうか咲夜さん、制服、着崩れてますよ。

「お、おはよう、お兄ちゃん……えっと、これってまさかお兄ちゃんが作ったん？」

「おはよう。うん、そうだよ。でもその前にサク、ちよつとこつちに来て」

今まで敬語で話していた相手と全く同じ姿の人を相手に急に敬語なしで話すのって結構大変だなあ。

と僕は口調に気を付けながら持っていた皿をテーブルに乗せ、咲夜さんの制服を正し、髪の毛を優しくといて上げた。

咲夜さんの髪の毛って柔らかいな、少し手櫛を通すと直ぐに寝癖が直った。

——よし、これで完璧。

「え、え、えっと、お兄ちゃん……?」

「ん? なに?」

「その、ありがと。……あと、お兄ちゃんって料理できたんやなんて、ウチ知らなかったわ……」

咲夜さんのその言葉に僕は思わずドキリとした。

「えっ!? いや、その、まあね、あははは……」

ときめいたんじゃないですよ? 僕の行動に不振がられたかどうか焦ったんです、はい。

………べ、別にしおらしい姿で上目遣いする咲夜さんに一瞬、目を奪われたとか、そんなんじゃないですからね!

「と、とりあえず食べようか、冷めちゃうし」

「う、うん……」

なんとなくお互いぎこちなくなってしまったが、僕が椅子に着くと咲夜さんもつられて僕の正面の席へと座った。

「「いただきます」」

この世界に来て初めてのいただきますは咲夜さんの紅く紅潮した顔を眺めながら言うことになった。

はあ、この先どうなることやら……

僕は前とは少し調子が狂うこの世界に一抹の不安を感じながらトーストをかじった。

——原作を知らない人たちの為の人物紹介

・綾崎ハヤテ

本編主人公。原作と性格が少し異なり、自殺を試みた事により若干、図太い精神を得た。また代わりに対年下属性を失う。なお、体力は壊滅的なまでに落ち、不死身スキルも失う。

スキル

・鈍感

・全自動フラグ建設

・不幸ホイホイ

・元執事（家事全般）

・眼鏡属性

・女ホイホイ

・男ホイホイ（条件付き）

・綾崎咲夜

関西弁を巧みに操る少女。原作とは違い、ハヤテの実妹なので名字も変更されている。家事と妹属性を手に入れた。その代わりツツコミスキルの性能が著しく低下。現在のフラグ建設率68%

スキル

・関西弁

・家事

・妹属性

・ツツコミ（精度D）

一章その2 登校⇒学校⇒修羅場……えっ？

朝食を終えて食器を片付けようとした僕だったが、それは咲夜さんの『ウチがやるからお兄ちゃんはそのでくつろいで』の言葉により止められてしまった。

本来ならここで引き下がらず、僕も手伝うのだが、これ以上手に咲夜さんに怪しまれるのも良くないし、なによりも彼女が好意で申し出た事だったので僕は素直にそれに従うことにした。

ほどなくして朝の家事が一通り終わり、時間もそろそろ登校する時間帯になったので、僕たち二人で一緒に家を出て、学校へと向かった。

「なんか、久しぶりやな。こうやってお兄ちゃんと一緒に学校行くなんて」

「あはは、そうだったけ？」

僕の通う高校と咲夜さんの通う中学は隣同士らしく、学校までの道のりをこうやって二人で向かっているんですけど——正直、気まずいです。

「そうやで。お兄ちゃんっていつも寝坊するし、ウチが何回も注意しても遅刻するんやから、ほんまに困ったもんやで。」

でも、なんで今日は寝坊せいへんかったん？ しかもウチより早よう起きて朝ご飯まで作ってたし」

「え、えっと、……ほら！ 僕もサクの兄として、いつまでもぐう

たらしてられないな、って入院してた時に思ったんだ。だから、今日から今までの生活を改めようと思って……」

「へーお兄ちゃんもやっとなる気になったんやなく。うんうん、ウチも前からお兄ちゃんはやれば出来るって思ってたで！」

あ、危ない。今のはうまく誤魔化せたかな？

まったく、人との会話がこんなにも疲れるなんて思いませんでしたよ。厄介なものですね、異世界ってやつは。

それにしても、他の人との会話でもこうやって誤魔化しながらやり過ぎないといけないのかな？ 咲夜さんだけならまだしも、他の人たち相手にボロを出さないようにしないと。特に、カンの鋭い一部の人は要注意だね。

「あつ、じゃあお兄ちゃん。ウチはこっちやから」

「あ、うん、そうだね」

ボロを出さないよう会話に集中してた所為か、目的地の学校が間近になっていた事に僕は咲夜さんの声があるまで気付かなかった。

僕たちの目の前にあったのは予想通り、白皇ではなく、僕が以前通っていた潮見高校の懐かしい校門だった。まあ、『僕』の部屋のダンスにこの学校の制服があった時点で気付いていたんだけどね。

うん、やっぱり懐かしいや。

確かに通っていた時間は白皇のほうが長いかもしれないけど、多分、これが白皇なら僕は『懐かしい』とは感じなかったと思う。

白皇みたいな気品や優雅さなんてものは一切ない、少し古くてみずぼらしい、どこにでもある普通の公立高校。だけど、その平凡さ

が僕には心地良かった。

「……久しぶりだな」

「まあお兄ちゃんは二週間ぶりの学校やもんな」

無意識に零れた僕の眩きはどうかやら咲夜さんの耳に届いたらしく、彼女は僕の隣に立って一緒に潮見高の校舎を眺めた。

「……なあ、お兄ちゃん」

「ん？ なに？」

「——明日もウチ一緒に登校してくれる？」

ふと、かけられた咲夜さんの声。ちらりと隣を覗くと彼女はもじもじしながら僕を見ていた。

そんなの、なんて答えるかなんて決まってますよ。

「もちろん、いいよ」

すると咲夜さんは確かめるように何度も僕に『ほんまに？』と聞いてきたので僕はその度に首を縦に振って答えた。

僕としては別に構わない事だったし、早くこちらの咲夜さんに慣れる為にも一緒にいる時間は長いに越したことはない。それに、

「——ありがとな、お兄ちゃん」

こんなに嬉しそうな咲夜さんの顔が見られるのならお安いご用ですよ。

その後、僕は中学生の人ごみに混じっていく咲夜さんを見届け、潮見高の校門をくぐり抜けた。

とりあえず咲夜さんとはうまくやれそうだ。兄妹という一番身近な関係の彼女に疑われたらその時点で終わりだからね。

それに、一番身近な咲夜さんに疑われないのなら、他の人たちも僕に違和感を感じることも余りないだろう。——うん、これならいける。

ところが、少しだけ緊張がほぐれ、胸を撫で下ろしたその時、僕の首に誰かが肩を回した。

「よお！ 久しぶりだな綾崎！ 相変わらず——へぶしっ!!?」

なぜだろう？ 身体能力に欠点のあるこの体でも、某ガチホモ変態執事の声を聞いた瞬間、あっちでの僕と同じ動きで敵性を迎撃できた。本能的な自己防衛、かな？

「い、いきなり何をするんだ綾崎……普段のお前ならにこやかに毒舌で返す筈なのに、今日は随分と刺激的な返事だな……」

あつ、ごめんなさい、というっかり……

僕は足元で、鳩尾に膝蹴りを食らわして一撃で沈んだガチホモ変態鉄道マニア、瀬川虎鉄に軽い謝罪を入れながら校舎のほうへと向かおうとした。

えっ？ なに？ 今のはかなりボロが出たんじゃないかって？

——すいません、自分、不器用ですから。

「あら、今日は彼に対して随分と過激ですわね」

僕は足元でうずくまる虎鉄君をガン無視で校舎に向かおうとする
と、いつの間にか呆れた表情で僕を見る彼女が隣に立っていた。

「えっと、お、おはよう——あ、アテネ」

「おはよう、ハヤテ。それにしても驚きましたわ。学校に来て一番
最初に見た光景があなたが見事に彼に叩き込んだ膝蹴りですもの」

「あははは、そ、そうですね」

はい、無理です。やっぱりあーたんは流石にまだ慣れませんよ。
かなりどもりながらの挨拶や、つい戻ってしまった言葉使いなど、
どうやら彼女の存在は僕にはまだキツイです。——それに、いくら
違うとは言っても彼女のと関係は心の整理が終わっていない。

「? どうかしたの、ハヤテ」

「い、いや。なんでもないよ」

彼女は少し心配そうな眼をして僕を見つめるが、僕にはその瞳か
ら視線を逸らすしか出来なかった。

「随分と騒がしいわね、何かあったの?」

彼女の瞳に精神的なピンチに陥っていた僕に救いの声が聞こえた。
まさにナイスタイミング!

騒ぎによって群がっていた生徒たちが、その人物の声が上がると同時にモーゼの十戒の如く、人垣が割れ、僕らの方へと続く道のりが出来上がった。

生徒たちがその人物を見る目の色はどれも憧れや尊敬、の好意的なもので、そこには凡人にはない非凡のみが許されたオーラが……って、ちょっと大袈裟過ぎますね。まあ、ぶっちゃけ、皆さん大好きヒナギクさんです。

生徒たちの黄色い声に少し耳を傾けると『副会長』という単語が彼女を指す言葉だと知ることができた。

どうやらこっちのヒナギクさんは会長ではなく、副会長のようにです。生徒会という点では同じですけど。

「あ、綾崎くん……」

人垣を裂いた道から現れたヒナギクさんは僕を見るなり、視線を少し下へと向け、体も何故かもしもじとしだした。

あれ？ ヒナギクさんってこういうキャラだっけ？

いつもの凜とした彼女から想像し難らいアクションをするので、一瞬別人かと思ってしまうた。

けど、ここがどういう場所なのか、というのを思い出せば納得も出来る。

咲夜さんにしろ、あーたんにしろ、どこか僕の知る人物たちと違う部分もあるので、こっちのヒナギクさんがこういう態度をするのは別におかしな事なんかじゃない。

それにしても『綾崎くん』、か……

前の時も彼女を怒らせてしまって、そう呼ばれていた時期もあった

たけど、こっちの彼女はこの呼び方が自然なんだろう。——なんだか、そう思うと少し寂しいかな。

でも、名前を知ってるって事は少なくともお互い知り合いの筈だ。とりあえず挨拶をしよう。

「——おはようございます、ヒナギクさん」

「「……………えっ？」」

『なにっ!!?』

僕が挨拶をした瞬間、アーたんヒナギクさんは二人同時に驚いたように声を上げ、周りにいた生徒たち（主に男子から）ざわっと某麻雀漫画のような効果音が出た。

Why? 何故?

「あ、あの、綾崎くん…………?」

「なんですか、ヒナギクさん」

しまった!?! ナチュラルに敬語で答えてしまった! そうだ、さっきも敬語で答えて…………だからみんな戸惑ったのか。くそ、こんな所でボロを出すなんて…………

「ねえ、ハヤテ。一つ聞いてもいいかしら?」

「な、なに、アテネ」

先程とは打って変わり彼女の凍てつくような視線が僕を貫く。恐ろしい事に目を逸らすことが彼女の放つオーラからそれを許さないと発していた。

僕は冷や汗をかきながら背筋をピンと張り、アーたんに向き合った。

「あなた、桂さんといつの間に名前を呼ぶような仲になったの？」

.....そっちかあああああああ！
！！？

「えっと、今のは、その、間違えて……」

「……間違いだったの？」

「いえ、違います。間違いなんかじゃない」

ヒナギクさん、上目遣いで縫るような目は止めてくださいよ！？
っていか何で僕も即答してるんだあああ！！？

「へえ、それはそれは、また珍しいこと。ハヤテが私と咲夜以外でファーストネームで女性を呼ぶなんてねえ」

「あ、あの、アテネさん？　なんでソンナニ怒ッテルノデショウカ？」

「私が？　怒る？　なぜ？　私はこんなにも笑顔ですわよ？」

にこっと微笑むアーたんの顔はまさしく女神様。
だけど目だけは絶対零度なのはまさに阿修羅様。

恐い、恐いよ。最後に剣を交えた時よりも恐いよ！

「えっと、じゃあ、私もハヤテ君って呼んだ方がいいわよね？」

空気読んでよ！ ヒナギクさんっ！

思わずそう叫ぼうとした時、僕は気づいた。

周囲の生徒たち（主に男子、偶に百合色の女子を含む）が僕に向けて殺気を集中させていたことに。

視線だけで人を殺せるのなら僕は一体何度殺されていたんだろうか。

いや、考えるのはよそう。今はそれよりするべき事がある。

「……逃げよう」

無茶を通せば道理が引っ込む、そう信じて僕は逃げ出した。

一章その3 エキセントリック少年H

——体は不幸で出来ている。

逃げる。逃げる。逃げる。ひたすら逃げる。例えこの身が壊れようとも足は止まらない。

なぜならそれは死を意味するから。

——血潮に塗れで 心はチキン。

躲す。躲す。躲す。ひたすら躲す。例え虎鉄君を盾に犠牲にしようとも体は止まらない。

なぜならそれは死を意味するから。

——幾たびの修羅場を越えて不死

駆ける。駆ける。駆ける。ひたすら駆ける。例え幼馴染みが呼ばうとも僕は止まらない。

なぜならそれは死を意味するから。

——誰一人にも駄フラグはなく、誰一人へのルートにも走らない。

砂埃が飛び交う。男子生徒から罵声が飛ぶ。アーたんが何故かサーベルを所持しながら跳ぶ。

——彼の者は常にハーレム、潮見の学び屋にてフラグに酔う。

校舎の時計を見る。長針が示すのは限りなく四に近い五。僕の勝利まであと六十二秒。

だが油断した。そこでまさかのケアレスミス。

前を見た。彼女が居た。デコに反射する太陽の光がとても眩しい。ああ、そうだ。こちらでは完全に百合色に染まった彼女は敵を見る目で僕を睨み付け、唯一の逃亡ルートに仁王立ちで立ち塞がる。

花菱美希。不敵無敵素敵な笑みを浮かべ彼女はパチンと指を鳴らす。

次の瞬間、数十本単位の薔薇が僕の周囲を囲むように地面へと突き刺さる。朱、赤、紅、薔薇は僕の足を止めさせた。

頭が閃く。勘が過ぎる。経験が伝える。誰の仕業かは直ぐに分かった。

冴木氷室。花菱さんに買収されたかつ!?

「悪いね、そういうことさ」

アルカイツクスマイルを浮かべた、薔薇を片手に佇むその癖毛の青年はまさに気障でクール。しかし、またその様が違和感なく似合っているのも彼の成せる業なのだろうか。

——故に、フラグに意味はなく。

周囲、包囲、四面楚歌、絶対絶命。

氷室さんによって足止めを食らった僕を、人という名の物理的な波が押し寄せる。

波は僕を囲い込み、その波を掻き分け降臨するは怒りの女神様。

そして死神と化した女神は罪人たる僕に告げた。

「なにか、言い残すことはある？」

告げられたのは死刑宣告。罪人Ⅱ僕は必死に弁解のチャンス求めたが、女神の前でそれは無惨にも却下された。

理不尽だ。っていうか、なんでアーたんはそんなに怒ってるの？

僕は周りに人が居るにも関わらず、というよりわざとみんなの前であの呼び名で彼女に問い掛けた。

案の定、彼女は面白いくらいうろたえた。

振り上げられたサーベルはおろおろと宙を彷徨い、陶磁器のような白い頬は一気に紅く染めあがる。

これで彼女は戦力外となった。だが、この手段を取ることで予測外のことが起こった。

バカな！ 周りのモブどもの戦闘力が跳ね上がっただど！？

それまで僕に向けられていた殺気は、友を目の前で爆殺された某戦闘民族の如く跳ね上がり、それはギリギリの所で均衡を保っていた現状を崩すのに十分過ぎた。

『散れえええ！！！！ 綾崎いいいい！！！！』

押し寄せるのは感情とヒト、僕は既に諦め、目をつぶった。しかし――

——その体はきつと不幸で出来ていた。

キーン、コーン、カーン、コーン……

その瞬間、僕の勝利を知らせる鐘の音がグラウンドに鳴り響いた。



僕は今日という日に生まれて始めて予鈴のチャイムに心から感謝した。

理不尽極まりない一対二百のリアルな鬼ごっこの終了を告げるそれはまさに福音であり、あと数秒チャイムの音が遅ければ僕はズタボロの雑巾にへとビフォーアフターしていたことであろう。

……い、今考えると恐ろしくて背筋が寒くなる。

とにかく、生き残ることが出来た僕はブレザーに取り付けられていた組バッチで自分のクラスを確認して教室へと向かった。

幸いなことに、一時期とはいえ潮見高に通っていた僕は校舎の中で特に迷うことなく、二年三組の教室へと辿り着く事が出来た。

ただでさえ今の体は体力のないのに、朝からあんなハードな運動をさせられた僕はすぐに席に着いて休を休ませたかった。

適当にクラスメートに挨拶を済ませ、自分の席へと向かおうとして、——そこで重大な事に気付いた。

僕の席ってどこ？

いくらクラスは分かってても、『僕』の席など分かる筈がなかった。

まだ担任は来ていないようで、何人かの生徒はまだ自分の席に着かず、談笑をしている。その為、空いている席が何カ所あるのだ。

うーん、どうしよう。

適当に誰かに席を聞いて教えてもらう、か？

でも、その人が普段喋らない相手なら怪しまれるし、普通なら自分の知り合いに聞いた方がいいな。

そこで僕は自分のクラスメートたちの顔を確認してみる。すると、驚きたことにクラスメート全員が見たことがある面子だった。

白皇の時と潮見の時のクラスメートが混じったような構成で、白皇の生徒会メンバーや東宮君なんかもちらほらと見かける。それにアーたんも同じクラスのようにだ。

っていうか、アーたんと同じクラスなら、さっきは一緒に教室に行ってた方が良かったな。

まあ、それは置いて、誰に話しかける？

まずはアーたん。

ダメだ。なんだかさっきの騒動から僕と目を合わそうとしてくれない。あとでちゃんと話さないと……

次は生徒会メンバーのヒナギクさん、瀬川さん、花菱さん、朝風さん。

………全員却下。まずヒナギクさんは下手に話しかけるとさっきみたいな騒動に発展する可能性があるからダメ。同じ理由で花菱さんもダメ。瀬川さんと朝風さんも前と同じ関係とは限らないしダメ。

——いや、そんな理由なら他のみんなもダメじゃないですか？
これ。

「はあ………どうしよう」

思わずため息が出る。

だが、そんな僕に思わぬ所から救いの手が舞い降りた。

「あっ！ おはよう、ハヤテくん。二週間ぶりだね、退院おめでとう」

「――西沢さん」

急いできたのか、汗を額に浮かべた彼女はショートヘアを二つのゴムで纏めた僕のよく知っている西沢歩さんだった。

こっちに来てから、会う人物はみんな僕の知っているようで、知らない人物だった。それが、やはり不安だったんだと思う。

だから 向こうと変わりのない接し方で話しかける彼女に僕はとても安堵していた。

「えっと、西沢さん。僕の席ってどこだったけ？ 二週間ぶりだから忘れちゃって……」

「久しぶりの学校だもんね、ハヤテくんの席ならあそこだよ。ほら、天皇州さんの隣」

「ありがとう、西沢さん」

窓際の席を指差す西沢さんに礼を言って僕は自分の席へと向かった。

途中、アーたんが目が合ったが、彼女は不機嫌そうに直ぐに逸ら

されてしまった。——まいったな、ほんと。

あとでどうやってアーたんの機嫌かと思いつながら席に着き、僕はなかなか来ない担任を窓から外の景色を眺めながら待つことにした。多分、担任って桂先生だろうなあ。

なんとなく、確信のあったその予想は見事に当たった。

「ごつめーん！　ちよつち遅刻〜けどセーフよね？」

勢いよく教室の扉を蹴り破り、ダイナミックに教室に入ってきた桂先生に僕は苦笑した。このヒトは相変わらずだな、って思いながら。

あつ、ヒナギクさん頭押さえてる。流石に頭も痛むよね。

「あら？　綾崎くんじゃない！　おっひさー！　体はもうだいじょーぶなの？」

僕の顔を見るなり桂先生はそのままのテンションで僕に尋ねた。先生が僕を気遣うなんてちゃんと意外。

「お久しぶりです、体の方はもう『♪』……つと、すいません」

大丈夫です、という前にズボンのポケットに入れていたケータイから着信音が鳴った。

ちゃんとマナーモードにしておけよ、と桂先生に注意を受けつつ、僕はケータイを取り出して電源を切ろうとした。どうやらさっきのはメールだったらしく、メール着信の知らせがディスプレイに表示されていた。

誰からだったんだろう？

少しだけメールの主が気になった僕は電源を切る前にメールの相手の名前を見る。

！？ この人って確か……

そこにはあまり聞き慣れない、しかし確かに聞いた事がある人物の名前が表示されていた。『姫神』、と――

一章その4 当方に死亡フラグ迎撃の用意あり！

本日午前の授業の最後のチャイムが潮見高に鳴り響き、授業から解放された学生たちが休息と昼食を行う昼休み。

周りのクラスメートたちは、ある者はより良い昼食を確保しようと購買という名の戦場へと赴き、またある者は友人と弁当箱を広げ、談笑をしている。

（ふう、午前中は何とかやり過ごせた……）

バレないように知らない誰かのふりをしながら生活を送るというのは非常に疲れる。

例えば、その人の普段するような何気ない仕草や癖、言葉使いなど、様々な部分でその人に演じなければならない。

幸い、といった所か、今のところ僕が演じる『僕』に違和感らしい違和感を抱く人はいなく、何とか過ごせている。こっちの『僕』はかなり勉強が出来るようだったので授業で教師に問題を当てられた時はヒヤヒヤしたが、意外とその問題をスラスラと答えることが出来た。

成績は悪かったとはいえ、仮にも超エリート学校の白皇の授業を受けていた僕が公立校が行う授業内容を理解出来ないということはなかったのだ。——とはいえ、部屋の本棚を見る限りでは間違いなく、頭脳はこちらの『僕』の方が優秀だと思うけど……

「それよりも今はこの”厄介事”を片付けますか」

若干気分が下がるのはポケットに入っているケータイから不幸な

オーラがビンビンに漂ってくるからだろう。正確にはケータイではなくあのメールから。

僕も本当ならこの昼休みという有意義な時間を利用して朝から一度も僕と顔を逸らし続ける女神さまの機嫌取りを行いたいんだけど、残念な事にこの時間は既にある先客の予約が入っていた。

「西沢さん。ちょっといいかな？」

とりあえずこれから向かう”厄介事”が待っている場所の位置を知ろうと、僕はチャイムの後直ぐにこの現状で一番話し易いと判断した西沢さんの席へと向かい、声をかけた。

「へ？ ど、どうかしたのかな、ハヤテくん」

すると西沢さんは僕を見て少し、というか、かなり意外そうな表情をした。彼女と一緒に机を合わせて弁当箱を広げていた瀬川さんと朝風さんも似たような顔をして視線をこっちに向けている。

あれ？ おかしいな。瀬川さんと朝風さんの反応は兎も角、西沢さんとは今朝、普通に話せたのに……イマイチこっちの『僕』の交友関係が掴めないな。

「生徒会室ってどこ分かる？」

とはいえ、既に話しかけてしまっているので、いくら後悔しようともう遅い。だからこれ以上不信任を抱かれないよう、僕はなるべく自然な口調で西沢さんに尋ねる。

「生徒会室？ それなら確か四階の美術室の隣だったと思うけど…

：何か用事でもあるのかな？」

「うん、ちょっと人に呼ばれて」

なぜそんな事を聞くのか、という表情の西沢さんに簡単な言葉ではぐらかせて、僕は少し急ぎ足で教室を後にする。

因みにこの僅かなやりとりの間で、女神さまと副会長殿が若干不機嫌そうに僕の背中に視線をぶつけてた気がしたが、取りあえず今は気のせい、という事にしよう。うん、そうしよう。

——さて、なぜ僕が何故、生徒会室なんかに行くかという理由は至って単純で、今朝の送信者名に姫神とあったメールに昼休みに生徒会室へ足を運ぶように、との有無が記されていたからだ。

生徒会室に呼び出す、という事は送信者は間違いなく生徒会関連の人間なのだろう。そして送信者は姫神さんだ。

ヒナギクさんが生徒会に入っていたから勘違いしていたけど、当然の事ながらこちらでは生徒会のメンバーは色々異なるみたいだ。

現在、僕が耳にした情報では前の仲良し三人の中で花菱さんだけが生徒会に入っているそうで、朝風さんと瀬川さんは生徒会に所属していないようだった。

——まあ、こっちの花菱さんを見れば何となくその理由は分かりますけどね。

とにかく、いま分かっているのはこれだけ。ヒナギクさんと花菱さんの他にどんな人が生徒会のメンバーなのかはまだ知らない。

だから姫神さんが生徒会に入っている、というのに関しては、僕からは特に驚いた事はない。

ええ、流石に慣れましたよ。というよりも耐性が付いた、の方が正しいですけど……

話しを戻しますが、姫神さんが生徒会に所属しているというのば別に構わない。けど、なぜわざわざ生徒会室なんか呼び出すのだろう？ 普通の用事ならメールや電話で済ます事が出来るのに、直接会って話す必要があるなんて……

そもそも、姫神さんという人物像が僕の中ではかなり抽象的だ。

姫神。知っているのはその名字だけで名前は知らない。性別は——確かマリアさんが”彼”と呼んでいたと思うからおそらくは男性。性格はハチャメチャで、主従関係に当たる主の”あの子”を特別視せずに対等な関係だったらしい。

そして”あの子”の前から突然姿を消した、三千院家執事の前任者。

これくらいだろうか？ 僕が姫神という人物に対して思い付くことの出来る情報は。

とはいえ、これはあくまで”あっちの世界”の姫神さんであって、実際にはこちらでの彼がどういった風に脚色されているのか想像もつかない。

「はてさて、鬼が出るか、蛇が出るか……どの道不幸には変わりませんね」

色々と考えている内に階段を登り終え、廊下に出て美術室の隣にある部屋と一歩、また一歩、僕は足を進める。

嘗ての経験によって培われてきた僕の中にある不幸警報機はメールが届いた辺りからずっと鳴りっぱなしだ。

——経験が告げる。あの部屋の向こうには間違いなく不幸が牙を研いで獲物が来るのを待っている、と

やがて進み続けていた足を止め、その扉へ僕は体を向ける。

生徒会室、そう表示された白皇に比べるとかなりランクが下がるボロいプレートが掛かってあるその扉の前に、やっとたどり着いた僕はゆっくりと深呼吸をした。

「——よし」

覚 悟 完 了

もはや死亡フラグを束で一気にへし折るくらいの気持ちで僕は片方の手でドアノブに手をかけ、余った手で扉にノックをした。

「ふえっ!?　　ちょ、ちょっと待って下さ——」

中から何か返事のようなモノが聞こえたような気がしたが、きっとそれは幻聴だろう。だって女性の声ですよ?　姫神さんの声なわけないじゃないですか。”彼”は”男”なんですから。

僕はその幻聴を華麗にスルーしてドアノブを捻り、扉が壊れる勢いで開けた。その時の僕はヤケクソだったと思う。

「失礼します、綾崎です。姫神さんは……って、へっ？ ひ、ひめ、ひめ、がみ、……さん？」

その時、僕の瞳に入ってきた光景は、机の上で手を組んで胡散臭い笑みを浮かべるグラサンの姫神さん（僕のイメージ）ではなく、真っ白で綺麗な肌だった。

次に僕の視線は”彼女”が付けていた意外にも大人チックな黒のブラへと向かって——思わず鼻血が垂れ、下の方を向いた時にチラリと見えたブルマという時代遅れな衣服になぜか犯罪のニオイがした。

その女は僕の憧れだった。

朱色の瞳に少しだけ涙が溜まり、普段は短く止めているその絹のような茶髪は、今は腰の辺りまで下ろされていた。

——不謹慎にも、その時僕は”彼女”がもの凄く綺麗だと思った。

余りに予想外な光景に僕は”姫神”さんを見つめたまま体が停止し、”姫神”さんの方は僕を涙目で見ながら体を震わせていた。

不思議とこの静止した空間の中で頭だけは何故か冷静で、僕は自ら犯していたある二つの過ちに気付いた。そして激しい後悔に陥り、数秒前の扉を開ける前の僕に罵声を浴びせた。

——僕の大バカヤロオオオオオオオ！！

「ハ、ハ、ハヤテくん……わたし、ちゃんと言いましたよね？ 待

って下さいって……」

まず一つ目の過ち。それはノックの返事を待たずに、——いや無視して扉を開けたことだ。

今まさに”姫神”さんが僕を見る目は親の仇を見るモノと同じだ。

——ヤバい。これはヤバい。どれくらいヤバいかというとヤバいくらいヤバい。死亡フラグを通り越してデッドエンドルートのレストランを一直線に特急で向かってますよ！

僕が犯した二つ目の過ち、それは——

「ま、マリアさん、すみませんでしたアアアアアアア！！」

”綾崎咲夜”のように名字が変わる人物が存在するのを忘れていたこと。

僕は日本人のみが持つリーサルウェポン、DO☆GE☆Z Aを疾風の名の元に実行した。

けど、体を震わせていた聖母は——僕を許してくれなかった。

「ハヤテくんのバカああ！！」

「あべしっ！！?」

土下座をして下げている僕の頭にマリアさんが放ったパイプイスがこんしんのいちげきを發揮し、僕は地面とキスをすることになった

た。

おお、はやてよ、しんでしまうとはなさけない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6856h/>

ハヤテのごとくをシリアス風コメディにしてみたinパラレルワールド

2010年10月21日22時40分発行